も発表しており、露伴の作風模索の姿勢が窺えるとのことである。

本発表は、露伴の書簡や当時の北海道の様子が窺える資料を丁寧に、また広く参照することで、露伴の北海道においての体験や思想に迫るものであった。文壇デビュー以前の露伴の動向には未詳な部分が多く、渡辺氏が「露伴文学最大の空白期」と発表資料でも述べる露伴の余市時代について、当時の資料を駆使して明らかにしようとする意欲的な発表であったとも言えるだろう。ただ、露伴の体験や交流の可能性については見通すことができたが、それらが作品あるいは作品の本質にどの程度影響を与えたのかについてはもう少し詳しく伺いたいところであった。また、作品論としての着眼点も散見されるような発表であり、欲張りな希望とはわかっているが、それらの点からの展開も非常に気になる点として残った。作品論としての論点に関わって言えば、渡辺氏が質疑応答で挙げられていた「ケチ」という言葉に着眼することもできる。これは露伴文学でよく用いられるということであるので、作品論に留まらず、露伴文学や露伴自身の思想に還元するような展開も望めるのではないか。

加えて、研究大会後の懇親会でお伺いしたところによると、渡辺氏は現地の役所関係の方との交流も密になされているそうだ。そのような交流による成果も、今回の発表の綿密さを支えているのだろう。テクスト自体に向き合うことは勿論重要である。しかし、本発表を通じて、テクストに関与している地や人との繋がり、分析もまた非常に重要であるということを改めて感じさせられた。

この日に行われた東北支部大会は、渡辺氏の発表ひとつのみで進行がなされた。そのため、発表と質疑応答ともに十分な時間が確保されたように思う。その質疑応答は、懇親会にも持ち込まれ、研究大会後の時間も含め非常に濃密な時間となった。渡辺氏のような丹念な調査がされた発表であれば、大会発表がひとつであっても非常に満足されるとの声が大会参加者の多くからあったことも記しておきたい。

書評

茂木謙之介『表象としての皇族　メディアにみる地域社会の皇室像』（吉川弘文館、二〇一七年六月）

山崎　義光

本書は、一九二〇年代から五〇年代にかけて（大正末から昭和二〇年代まで）の新聞雑誌メディアにおける皇族表象を対象に、戦前から戦後への連続性と差違を論じた文化史的研究である。

この時期は、明治政府の誕生、主権者として天皇が位置づけられた大日本帝国憲法発布以来約半世紀を経た戦前戦中から、国民主権となる日本国憲法発布後の戦後にまたがる。従来の研究では「天皇・皇后・皇太子への偏重」があったのに対して「皇族」に焦点をあてることで「近代天皇（制）」研究に欠けて

いた観点を提示することを企図したという。皇族は、天皇の代理を担いつつも、天皇とは区別され、柔軟多様に国民統合の役割をになって国民の前にメディアを介して露出する。本研究では、全国に読者層をもつ新聞雑誌メディアとともに、地方新聞をはじめとする地域メディアにも注目する。それによって国民の崇敬対象であるとともに、その集権的な表象を利用した地域振興の思惑にかかわる様相をとりあげた。

二〇年代以降の日本社会は、国民大衆が社会層として顕在化し、新聞雑誌メディアの読者層が飛躍的に拡大した時期にあたる。本研究では主題的にとりあげないが、ラジオ放送が始まった二五年からテレビ放送が開始される五三年までの時期に重なる。マス・メディアが量的にも技術的にも拡大・刷新した。この時期を捉えて「メディア」における「表象」としての「皇族」を対象に据えた問題設定は、想像の共同体としての近代日本が、大衆社会化するなか、メディアにおいて、どのように統合的に表象されたかという観点からみても的を射た時代設定だと思われる。

調査対象としたのは、朝日新聞・アサヒグラフといった新聞雑誌から、地方新聞・県広報誌・校友会雑誌等の零細紙誌にいたるまでの紙媒体「メディア」における皇族表象である。全国紙誌の記事・写真を丹念に拾い上げて分類・分析することで、皇族表象の「文法」（定型的パターン）を明らかにした。その定型をふまえつつ、地方における皇族表象の変異を見定めた。言語的、図像的な皇族の断片的表象群を多角的考察することで、戦前から戦後にかけて、前景化する文脈を変化させながら連続性をもって表象されてきた様相を明らかにした。

本書は二部構成で各部は五章構成である。

「第一部　〈現人神〉と国民のはざま　昭和戦前戦中期における皇族」の標題の下、「第一章　利用・崇敬・規制　宮内省と皇族表象」では、皇族の行動や足跡、また商品販売からメディアにおける扱いにいたるまで、どのような原則と規制のもとに表象が宮内省によりコントロールされていたかを論じる。それを踏まえて「第二章　新聞メディアの中の皇族たち　『東京朝日新聞』『朝日新聞』を中心に」では、全国紙「二七六七件」の記事を分析する。皇族は、天皇の代理として崇敬の対象となるとともに、けっして同一視されることなく峻別される。その一方で、自由な服装や〈家族〉イメージをともないながら、国民生活に近しい存在として表象される。「第三章　皇族図像の変遷過程　『アサヒグラフ』を事例として」では、写真として表象され、政治・軍事・産業振興等にかかわって、この時代の皇室と国民とを媒介する集目的な「スター」表象であったことを示した。「第四章　「御成」報道の文法　『河北新報』における報道を中心に」では、東北地方への「御成」報道に焦点をあて、聖性・権威とともに国民と近しい「平民」性を読み取れるとした。「天皇と国民の間に介在する皇族という存在」の表象分析から、「〈天皇―国民〉という二極構造では回収しきれない近代日本における天皇制システムの多層性」（p.138）があるとした。「第五章　津軽の秩父宮　地域社会における皇族イメー

ジの形成と展開」では、秩父宮が青森県弘前市の陸軍歩兵第三一連隊に在勤した際の地方紙誌における表象をとりあげ、地域文化振興という文脈のなかで、中央と地方との接続、地域の求心的規範的意義をになって表象されたことを示した。

「第二部　象徴天皇（制）と変わらざる余白　戦後期における皇族表象」の全五章では、第一部の各章と対応するように、戦後における皇族表象を論じた。「第一章　自己表象の戦略性　秩父宮自筆記事の分析から」では、戦前戦中において「平民的」と冠されてきた皇族表象が「民主的」と変わり、戦前戦中期における政治上の位置づけから切断されるとともに、国民に親しまれた天皇・皇室像の連続性がみられるとした。「第二章　戦後新聞メディアにおける残存　『朝日新聞』における皇族表象」では、第一部第二章と同様の観点から分析する。政治・軍事にかかわる記事は減退するが、スポーツ・学問・芸術の文化的主体としての表象や、社会福祉・産業振興にかかわることには連続性が認められ、「民主」的で「〈人間〉」的な表象と意義づけられたとした。従来天皇・皇室表象については、戦前戦中と戦後との切断と変移が強調されてきたが、具体的な事例を通時的に見わたすことで連続性が認められる側面があることを指摘した。そのことは「第三章　グラフ誌における連続性　『アサヒグラフ』における皇族表象」においても確認される。戦前戦中すでに現れていた「平民」性は、戦後においても「スター」的に表象される。「断絶論的な枠組みを採用した従来の天皇（制）イメージ研究」に対して、本研究の皇族表象から見えてくるのは戦前戦中から戦後へかけての連続性であるという(p.220-221)。「第四章　戦後「御成」報道のレトリック　『河北新報』を中心に」では、第一部第四章における分析と比較しながら戦後の御成報道を検討している。具体的には天皇の代理としての台風被害地慰問、産業振興、地域振興、ハンセン病療養所訪問、自転車競技会閉会式参加等の記事を取り上げた。気軽な服装で写真に収まるなど、皇族としての扱いのなかにも親しく国民に臨む姿が表象される。戦前戦中からの連続性とともに、よりいっそう国民に近しい表象となって現れることを指摘する。

「第五章　残響する記憶　戦後青森県域における皇族表象の生成」では、第一部第五章に関連し、戦前戦中に軍人として在勤した秩父宮の追悼記事、秩父宮妃勢津子訪問、秩父宮記念碑の掘り起こしと再建に関する青森県域における表象をとりあげた。五三年に逝去した秩父宮追悼記事は、往事を懐かしむことがおのずと軍人としての表象を招き寄せる。くわえて、七三年の秩父宮記念碑再建は、自衛隊誘致を記念する文脈で表象され、旧陸軍と自衛隊を結ぶ役割を秩父宮表象が担った。戦前戦中の軍人としての表象が戦後七〇年代に入って戦前と戦後をむすぶ表象として機能したことを指摘した。

本研究は、全体の構成、対象の選択、論脈の編成が堅実である。朝日新聞、アサヒグラフといった全国紙誌の調査分析をベースに、地域紙誌の表象を対照することで、多様な文脈における皇族表象の振幅を確かめている。

本研究が問うのは表象される対象（皇族）である。表象する主体は匿名的もしくは無名で誰であってもよい。そして、対象としての皇族は凡庸・月並みである。皇族表象の役割は、国家的権威と規範を示すとともに、あらゆる階層の国民を国家的な価値に媒介し包摂することにある。それゆえ、一方で規制・検閲の対象となり権威をおとしめる逸脱や批判を回避するよう操作されながら、他方で国家の範域に均しく関わり、社会体制の変化にあわせて国民国家統合の意義も変化する。皇族表象は、天皇の代理的な役割をはたすことで国家の権威が及ぶ範域における諸々の活動に対して価値を付与する役割を果たす。その点で、天皇につらなる権威性をもつ。でありながら、天皇そのものに対しては臣下としての立場がハッキリと示される。その点で「平民」に近しい。天皇表象より多様な表情をみせながら衆目を集めるスター的存在として表象され、国土の範域としての地方を媒介するなかでは地域に固有の文脈にも足跡を残す。天皇と国民のあいだを相対的に柔軟多様な文脈で媒介しうる存在だったことに特長がある。本研究はこうした皇族表象の「文法」を明らかにした。

二〇年代から五〇年代の社会が大衆社会化を基層としているとみたとき、戦前戦中の国家総動員と戦後の民主主義とが連続的に見えてくる。大衆社会時代の国民国家統合は、マス・メディアという皮膜によって調整される。戦前戦中の国家による検閲と戦後の占領軍による検閲とは、その組織や手法、目的や価値観を異にしつつも、統治にかかわる表象を規制し利用したことにおいて共通する。皇族表象の水準でみたとき、戦前戦中における政治・軍事の文脈が減退する一方、社会福祉・文化新興の文脈が継続して前景化され連続性が認められるとした。戦後における天皇表象は「戦前の皇族表象を規範的な型」とする「天皇の〈皇族化〉」（「終章　表象としての皇族」p.295）だったという。国民に近しい皇族表象こそが戦後における天皇表象の「〈原型〉」となりえたのは、大衆社会的な基層の連続性のなかで皇族表象が戦前期から試されてきたことによる。

終章では、三島由紀夫の天皇・皇族表象に触れている。三島は天皇を現状肯定のシンボルであるとともに革新のシンボルでもある二面を備えると捉えていた。「いまあまりにも現状肯定的ホームドラマ的皇室のイメージが強すぎる」（林房雄・三島由紀夫『対話・日本人論』番町書房、一九六六年、「第六話天皇と神」）と三島が述べた「皇室のイメージ」の原型は、戦前期から生成していた皇族表象に起源があったということになろうか。